

事例1 チーム・ジャパン・パッシブハウス

日本の技術でコストを抑えた超高性能住宅

第三者組織の設立・独自認証も視野に

共同プロジェクト「チーム・ジャパン・パッシブハウス」の第1号物件が横浜市に完成。このほど見学会を開催した。

「チーム・ジャパン・パッシブハウス」はイーアイ（東京都港区、堀内正純社長）、建築舎（東京都八王子市、齋藤敏晴社長）、オフィスコンドウ（東京都品川区、近藤良一社長）の3社が中心となり、日本版パッシブハウスの普及を目指して立ち上げたプロジェクト。

第1号物件は、ドイツの「パッシブハウス研究所」の「パッシブハウス基準を満たす性能を確保した高性能住宅。工事費用は46坪で3780万円（太陽光発電システムなど含まず）。ただ、このプロジェクトが目指すのは、性能は「パッシブハウス」の基準を目標としながらも、日本の地域性を考慮した独



横濱の日本版パッシブハウス第1号。オフィスコンドウがプロジェクトをコーディネートし、総合プロデュースはイーアイ、基本設計はハウスタイルズ、実施設計・施工は建築舎が担当。このほかに、パッシブエネルギー・ジャパン（換気扇提供）やエコ・トランスファー・ジャパン（高性能調湿気密シートなど提供）、飯田ウッドワークシステムが同プロジェクトを支援している

とも目指す。そのため、一例として、今回の物件では窓に飯田ウッドワークシステム（北海道札幌市、飯田信男社長）の木製窓を採用した。この窓は北海道の寒冷地での実績が多

くあり、海外の高性能木製窓に比べても性能的に見劣りしない。現在、東京に工場を新設中で、メンテナンスや交換などにも臨機応変に対応できるようにする。

能・コストの製品はまだ日本にはないという。これらから、今後はプロジェクトの活動の一つとして建材や設備についてもオリジナルを開発していくことも視野に入れている。

ただ、日本製の建材・設備だけではまだ「パッシブハウス」レベルの達成は難しいのが現状。たとえば、この第1号物件の換気扇にはドイツ製の「インベンター」を6基採用した。ダクト配管の必要がなく、低電力で、構造が非常にシンプルなため、メンテナンスの手間やコストを大幅に削減できるメリットから採用した。同等の性能・機能基準を作る計画だ。

ドイツ基準の超高性能住宅「パッシブハウス」日本での挑戦〜二つの施工事例

事例2 島田材木店 茨城県石岡市

技術と日本の建築技術との融合を目指し、在来木

シート施工の採用や、耐力壁の継ぎ目・窓枠の隙

（）と誇りま